

# 生研 ニュース

1992.4.1  
No.15

PHOTO 岡宮誠一



## IIS TODAY

●東大生研所長  
原島文雄  
(右)

●前所長  
岡田恒男  
(左)

岡田教授は平成元年4月本所の第16代所長に就任され、3年間にわたる重責を全うされて本年3月末に退任されました。本所の将来計画をはじめとする多くの重要課題に積極的かつ精力的に取り組まれたことを心より感謝いたしますとともに、今後のますますのご活躍を期待

いたします。

4月からは新所長・原島教授を中心に教官・職員一同力を合わせ、本所の使命達成に向けてよりいっそうの努力を続けてまいりますので皆様のご支援をお願いいたします。(事務部長・鳥尾幸寛)



## 退任にあたって

岡田恒男

私にとりましてはまさに重責でありました3年間の所長の任期を終え、後事をすべて原島文雄教授に託して、再び教授の職に専念することとなりました。3年前、所員の皆様に就任のご挨拶をいたしました際、私はあえて多くの課題を自らに課しました。本稿を草している今も、引き継ぎの準備に追われ、一つ一つの課題の進捗状況を振り返る余裕もありませんが、力不足のため多くの問題を未解決としたまま退任することになったというのが偽らざる心境です。同時に、3年間所長補佐としてともに管理運営の仕事に携わっていただいた尊敬する原島教授に後をお願いできることになり、もう何も心配はないというのも正直なところです。

とはいえせっかくの機会ですので、一、二思いつくまま書き並べてみることにいたします。なんといても最大の課題は、研究棟の改築問題、あるいはキャンパス問題でした。研究・教育活動は個々の研究室にお任せするとしても、老朽化した劣悪な研究・教育環境の改善は本所の永年の願いであり、私への大きな課題でした。幸いにも、将来計画委員会より第6次報告として答申を受けた「都市型総合工学研究所」としてのアカデミックプランに対する学内外の理解を得ることができ、これを実現するためのキャンパスプランを、

全学のキャンパス計画の一環として位置づけられる段階まで進めることができました。計画の実現までにはなお多くの年月を要することになるかもしれませんが、ひとつの方向づけができたのではないかと考えております。

本稿が掲載される「生研ニュース」の創刊についても一言申し上げるべきでしょう。本所では創立以来、「年次要覧」を年に一度刊行し、一年間の活動状況を学内外に広く公開してまいりました。昨今、大学の自己点検あるいは自己評価の必要性が議論されるようになりましたが、「年次要覧」の刊行はまさにその先取りであったといえましょう。しかしながら、これとやや趣を異にした少し「やわらかい」広報誌の必要性を感じ、渡辺 正 助教授に初代の編集長をお願いして一切をお任せしたところ見事にそのスタイルを完成していただきました。退任にあたって何か思い出のある写真をつけて寄稿せよとの編集長のご下命でした。考えているうちに、「完成なる生研新研究棟」というタイトルの写真を掲載した夢を見ました。しかしこの写真は次期所長のために残しておくことにいたします。

3年間、ほんとうにありがとうございました。





## 所長就任にあたって

原島文雄

本年4月より生産技術研究所の所長として全構成員の皆様とともに研究・教育の重責を果たしていくことになりました。たいへん光栄に思いますと同時に、責任の大きさに久しぶりに緊張感をもっております。個人的なことからはじめて申し訳ありませんが、この機会に生研と自分のかかわり合いについて考えてみたいと思います。生研が千葉から六本木に移転した翌年（1962年）、私は大学院学生として生研にまいりまして、以後大学院学生として5年、教官として25年、合わせて30年にわたりこの六本木の地で生研とともに人生を送ってまいりました。この間、多くの先輩・同輩に恵まれ、生研という基盤の上に、ライフワークとしての自分の研究、人格形成、グローバルな社会の一員としての意識、さらに感性・美意識の形成にいたるまで影響を受けたことは当然であります。この場をかりまして、生研というコミュニティーを通して多くの機会を与えてくださいました皆様がたに厚くお礼申し上げたいと存じます。

生研の現状とその将来について考えてみましょう。生研は、その設置目的すなわち「生産に関する技術的諸問題の科学的総合研究、並びに研究成果の実用化試験」にもあるように、工学領域のほぼ全分野にわたる部門を擁することにより、各領域における独創的研究と、それらを流動的に融合して生まれる学際的研究を通じて新しいディシプリンの自発的発生をめざし、内外の高い評価を得てそれを実行してきた総合工学研究所であります。また、都心に立地することにより、社会との日常的接触、情報の収集と発信、さらには先端に挑む世界の人材との交流が可能となり、工学ディシ

プリンの変化をつねに迅速・的確にとらえ、かつ自身で創出することによりその目的を果たしてきた都市型研究所でもあります。

現在、生研は4センター、1客員部門、3寄付研究部門を含めて53の研究部門を有し、約400名の教職員が在籍しております。また千葉実験所では、都内では設置困難な大型の実験設備を用いた研究が行われています。このような規模は大学の付置研究所としては日本最大であるのみならず世界でも有数なものであります。さらに生研は、東京大学の大学院教育にも深くかかわり、約400名の修士および博士課程の学生が研究に参加しております。このほか受託研究員、研究生などの制度を通じて多数の研究者、高級技術者の養成にも力を入れており、その対象は全世界に及んでいます。

生産技術研究所の英文名Institute of Industrial Scienceは、四十数年前に発明された名称でありながら、今日の社会においてますます新鮮な響きをもつことは驚きであります。欧米でIndustrial Scienceの重要性が論議されているのはつい最近であることを考えると、先輩方の知恵の深さに敬服する所です。生研は将来とも、四十数年の輝かしい歴史と伝統のもとに、工学価値への貢献、社会への貢献、高級技術者教育への貢献、さらには国際貢献という工学の4つの方向をめざし、発展を続けていくものと信じております。常に自己改革を行い、社会との密接な関係を維持していくためには、生研の全構成員のいっそうの努力ならびに日頃よりご指導いただいております関係の方々のご理解とご支援が不可欠でございます。皆様方からの幅広いご意見、ご批判を期待しております。

## 所長のプロフィール

- 1940年 東京に生まれる  
1962年 東京大学工学部電気工学科卒業  
1967年 同上 大学院工学系研究科電気工学専攻修了  
工学博士  
1967年 東京大学生産技術研究所助教授  
1980年 同上 教授 現在に至る

新所長・原島教授は第3部（電気・電子・情報通信工学系）に所属し、パワーエレクトロニクス・制御工学・ロボット工学が専門分野です。国内では電気学会・計測自動制御学会などが活躍の場で、それぞれ論文賞受賞のほか理事あるいはフェローとして重責を果しています。加えて、会員数31万人を擁する国際学会IEEE(Institute of Electrical and Electronics Engineers)では各種委員会の委員を歴任後1990年にはSecretary(総務副会長)に選出され、まさに席のあたたまる暇もない時期がありました。IEEEでもAnthony J. Hornfeck Award(1984年)、Eugene Mittelmann Award(1988)ほかの賞を受賞しており、典型的な国際派研究者だと申せましょう。

いっぽう所内では所長補佐のひとりとして運営の重要な一翼をにない、先の将来計画委員会(第6次)では座長となつて、総合工学研究所である本所の使命の明確化ならびに歩むべき道の敷設に尽力しました(報告書は本紙1990年7月号に掲載)。

研究・管理運営の暇をみつけてはいろいろな趣味を楽しみ、一日一冊読破の読書、水泳・エアロビクス、はては乗馬と、興味の広さに限りがないかたでもあります。



▲モンテビデオ(ウルグアイ)でロボット工学の講演(1990)



◀乗馬を楽しむ(1989)

### 編集後記

本号は創刊以来はじめての特別号です。新旧両所長ともたいへんお忙しく、かぎられた期日の中を寄稿いただきまして感謝申し上げます。表紙の撮影もスケジュールの調整がなかなかむずかしくて、やっと先月11日にそ

う踏みが実現できました。撮影に立ち会ったひとりとして感想を申しますと、どちらがどうだとは言いませんが、最初の数ショットではさすがにお二人の緊張の度合いにくっきりと差が見えました。ともあれ岡田先生には3年間のご苦勞をねぎらい申し上げるとともに、新所長・原島先生には心からエールを送りたいと思います。(W)